

【修士論文要旨】

二字漢語をめぐる誤用 —中国人日本語学習者を対象に—

張 璐*

本研究は、中国人日本語学習者を対象に、二字漢語をめぐる問題点について、学習者の作文のあらわれた誤用を量的および質的に分析し、誤用の原因や学習者への指導法などについて考察するものである。中国語母語話者が日本語を学ぶ際、母語の中にすでに存在している漢字の知識が学習の妨げになることがしばしば見られる。特に、日本語で作文を書く際に、二字漢語をめぐる誤用が多いことが指摘されている。日中両国ではともに漢語を使い、互いに書き方も同じ、意味も同じ日中同形語があるため、中国語母語話者は日本語習得において有利な点が存在すると言われている。しかし、一方で漢語の知識が負の転移として働いて誤用を引き起こす場合もある。

これまでに、二字漢語の構文を使用する際、二字漢語の品詞性と意味に関する研究と、二字漢語動詞と共に起る助詞の誤用に関する研究がおこなわれている。しかし、これまでの研究は、二字漢語における誤用を一つの観点に限定して検討したものがほとんどで、総合的に検討した研究がなかった。本研究では、用例を挙げ、二字漢語をめぐる誤用の原因を具体的かつ総合的に分析した。

本研究は、中国人日本語学習者を対象に、作文コーパス『上海交通大学日本語学習者書面語語料庫』（以下『語料庫』とする）と『学習者作文コーパス「なたね」』（以下『なたね』とする）を利用し、二字漢語に関する誤用の原因及びそれに対する改善策を検討することを目的とする。

『語料庫』は中国の大学の日本語学科に在籍する学生が書いた1931本の800字程度の作文を収録したものである。『なたね』は日本の大学院、大学、または語学学校に在籍する学生が書いた285本の700字程度の作文を収録したものである。よって、『語料庫』は日本語を外国語として学習する日本語学習者(JFL)で、『なたね』は日本語を第二言語として学習する日本語学習者(JSL)による作文が構成されている。本研究は、まず、この二つのコーパスから二字漢語をめぐる誤用例を抽出した。次に、二字漢語における品詞性に関する誤用、意味用法に関する誤用、助詞に関する誤用、文法的共起性に関する誤用の四つの方面から考察した。最後に、JFLとJSLの日本語学習の環境を比較しながら、学習環境がどのように学習者に影響するのか考察した。

『語料庫』と『なたね』を分析し、二字漢語をめぐる誤用状況は以下の通りである。

①『語料庫』の誤用件数は合計147件である。そのうち、意味混同が53件(36%)で、品詞性が34件(23%)で、助詞が47件(32%)で、文法的共起性が13件(9%)である。②『なたね』の誤用件数は合計146件である。意味混同が83件(57%)で、品詞性が24件(16%)で、助詞

*国際人間学研究科言語文化 博士前期課程2年

が19件（13%）で、文法的共起性が20件（14%）である。③両コーパスに共通して、意味混同の誤用が一番多いことがわかる。④意味混同と助詞には、両コーパスの誤用件数の差が大きいのにに対し、品詞性と文法的共起性には、差があまり大きくないことが明らかになった。つまり、これは学習環境が異なっても、中国語を母語とする日本語学習者は同じ誤りを犯すということを示している。

上述した二字漢語をめぐる誤用状況のうえに、各種類の誤用をさらに詳しく分析した。まず、品詞性に関する誤用は下記のようなものである。①両コーパスとも誤用の種類が多い。『語料庫』には8種類があり、『なたね』には7種類ある。そして、②日本語では動詞、中国語では形容詞として使われる誤用件数が一番多い。次いで、日本語では名詞、中国語では形容詞として使われる誤用件数が二番目に多い。③『語料庫』の中に日本語では形容動詞で、中国語では動詞である誤用の以外、両コーパスの誤用の種類はほぼ同じであることが明らかになった。

二字漢語の意味に関する誤用について、日中同形語の問題を含むもの、漢語から和語に変えたほうが良いもの、中国語語彙をそのまま使うもの、意味的に共起するものという四つの種類に分けた。そのうち、日中同形語の問題を含むものは、さらに同形同義語、同形異義語、同形類義語の3つに下位分類した。日中同形語の問題を含む誤用が圧倒的に多く、78件（57.3%）で、半数以上を占めている。次いで、漢語から和語に変えたほうが良いものに見られる誤用が22件で、16.2%を占めている。中国語語彙をそのまま使うものに見られる誤用が19件で、14.0%を占めている。一番少ない誤用は意味的に共起するもので、17件（12.5%）のみである。

二字漢語の文法的共起性に関する誤用について、ボイスの誤用、テンスの誤用、アスペクトの誤用、その他という四つの種類に分けた。そのうち、ボイスの誤用が圧倒的に多く、14件（42.4%）である。次いで、テンスの誤用が8件で、24.2%を占めている。アスペクトの誤用が6件で、18.2%を占めている。残る誤用例がその他であり、最も少なく5件（15.2%）であるということがわかった。

二字漢語動詞と共起する助詞の誤用を分析した結果は以下のようにまとめた。まず、両コーパスはともに「に」を使うべきところに「を」を使う（を→に）誤用が一番多い。特に『語料庫』で半分以上を超える。次いで、「を」を使うべきところに「に」を使う（に→を）の誤用は二番目に多い。両コーパスの誤用件数を合わせると、「が」を使うべきところに「を」を使う（を→が）（5件）と「と」を使うべきところに「を」を使う（を→と）（5件）の誤用も同じであることがわかった。

誤用の原因について、下記のようにまとめた。①品詞性に関する誤用については、「日本語では名詞であるが、中国語では形容詞として使われるもの」と「日本語では動詞、中国語では形容詞として使われるもの」である二字漢語において間違いが多いという傾向が見られる。中国人日本語学習者が日本語に訳すというプロセスを経るため、母語の影響によって、学習者が母語における品詞認識そのままに日本語でも使用していることから、多くの誤用文が産出される。

②意味用法に関する誤用は、学習者に最も間違われる誤用である。母語の知識に頼り、日中の意味の異同を考えず、中国語の用法と同じように使用してしまう。一部の学習者は日本語の知識

不足のため、よく知らない和語の使用を回避する傾向がある。

③文法的共起性に関する誤用については、主にボイス、テンス、アスペクトの観点から分析した。中国人日本語学習者はボイスに関する誤用が多いことがわかった。日本語は、主語、格標識、述語間の形態統語論的な制約があるため、受動形式や使役形式が用いられなければならないが、中国語に日本語のようなルールがないためである。

④二字漢語動詞と共起する助詞に関する誤用については、「目的語＋を＋他動詞」の構造によって、中国人日本語学習者に「を」格の過剰一般化が起こっている。そして、日本語自身の「複雑さ」も格助詞の習得に影響を与える。「に」や「を」や「で」などがさまざまな意味機能を持つため、学習者がすべての意味機能を身につけることは容易ではないと考えられる。

本研究は、二字漢語をめぐる誤用について、品詞性、意味、文法的共起性、二字漢語動詞と共起する助詞の観点から誤用の原因の分析をおこなった結果、中国語の漢語と日本語の漢語が似ているため、中国人日本語学習者は母語の影響を受けやすく、両言語の違いに気づかずに中国語の知識をそのまま日本語に転用してしまう傾向があるということがわかった。

JFLとJSLに関しては、学習環境に違いがあっても、品詞性と文法的共起性については、大きな違いは見られなかったこともある。しかし、インプットとアウトプットの機会の多さや媒介言語としての教師や教科書などによって、JFLとJSLでの学習者は意味と助詞については誤用においてかなり差があることもある。さらに、日本語教育への示唆として、日本語教育現場で日本語教師は二字漢語を導入する際、母語の知識だけに頼ることなく日本語との相違点も学生に注意すべきであろう。